

雑 報

擇捉島のハツカネズミに就て

昭和七年十二月に擇捉島紗那の知人倉澤淳一氏からかねて依頼中の同島の鼠三匹を寄贈された。内一匹は同島管林局の人々により山林中より採集されたドブネズミであり、残りの二匹は人家より採集されたハツカネズミである。

北日本のハツカネズミは黒田博士により研究され、大正十三年に幌筵島よりチシマハツカネズミ *Mus kurilensis* KURODA の報告あり、更に昭和三年に同博士は北海道のハツカネズミを本州産のものより區別されエゾハツカネズミ *Mus molossinus yesonis* KURODA と命名された。擇捉島は地理的に北海道と幌筵島の間中に位し、従つて該地産のハツカネズミが兩種のいづれに屬するかは興味ある問題と思はれた。筆者の許に送られた2標品は共に雄であり一匹は成獣、他は幼獣である。

本標品は頭胴長の尾長よりも短い點及び腹部の純白色の點により一見チシマハツカネズミと區別される。又本標品は外觀並に頭骨のあらゆる點より本州及北海道のハツカネズミに類似を示す。更に詳細に本標品と北海道産エゾハツカネズミとを比較するのに 本標品は黒田博士により記載されたエゾハツカネズミの特徴とする、背部の暗色の點、腹部の灰白色(冬毛)の點、尾の下面暗色の點並に後足長の長い點のいづれにも該當するところを持たず、即本標品は本州産のハツカネズミ *Mus molossinus molossinus* TEMMINCK et SCHLEGEL と全く同種であることを知る。

元來ハツカネズミは船舶と共に自由に移動し得て、地理的分布を論ずる上で價值少いものとされてゐるが擇捉島のハツカネズミも本州より何等かの人爲で持ち運ばれたものと推察される。

(徳田御稔)

Mikrophotographie と photomicrography

英語で書かれた邦人同學諸氏の論文に顯微鏡(的)寫眞を添へて之を microphotograph と呼んで説明してあるのを屢々見受けるが、私は之に疑義を持つて居る。獨逸語では Mikrophotographie 又は Mikrophotogramm, 佛蘭西語でも microphotographie で良いが、英語で云ひ度いならば photomicrograph と云ふ方が正しい、と迄は行かずとも少くともより多く慣例的であらう、かと思つて居るのである。

成程英語の辭書を繰つて見ると microphotograph を説明して又の名 photomicrograph とあり、後者の項を引いて見ると又の名として前者をあげてあつて、兩者を全く同格に取扱つてある。ところが流石に Century Dictionary にはこの兩者は混同すべからずと明記してある。

顯微鏡術式や寫眞術の本にこの顯微鏡(的)寫眞の法を説いてある場合、英國米國の何れを問はず、英語の本ならば常に photomicrography の字を探つてあり、私の管見では唯の一度も microphotography と書いたのを見たことがない。

私の了解する限りでは英語で microphotograph と云ふのは顯微鏡を用ひて撮つた廓大寫眞でなく、反對に、顯微鏡で見なければならぬやうな細かい縮小寫眞と云ふ意味に使はれて居る。即ち手紙を縮寫して傳書鳩に携帯させる場合や、ペン軸や鉢の柄などに細かい孔をあけて嵌め込んだ、明りに向つて覗いて楽しむやうに作つたあの細かい寫眞などを指すのが通例である。今手許に數年前の "The British Journal Photographic Almanac" を出して見たが、之に microphotography と題して説いてある記